

論文の内容の要旨

論文題目 市町村保健師の職業的アイデンティティの構造

氏名 岩崎 りほ

緒言

世界の公衆衛生看護の中で、日本の保健師はユニークな存在である。保健師が看護師とは別個に国家資格として位置付けられていること、自治体に働く割合が多いこと、直接的な対人保健サービスから施策化まで多様な活動を行っていること等がその特徴である。自治体保健師は、日本の地域保健従事者（保健所及び市町村の従事者）の 45%を占め、その活動の質は、公衆衛生の質に大きな影響を及ぼす。このため、自治体保健師が、その職業に誇りを持ち、アイデンティティをもって仕事ができることが重要である。

一方、日本の自治体保健師を取り巻く状況は、地域住民の健康課題の多様化・複雑化、社会制度の度重なる新設・改変、更に、自治体の組織改編等の煽りを受けて、大きく変化している。特に、従来、保健師が配置されていなかった福祉や政策・企画部署にも分散配置されるようになり、働き方も、地域住民に直接かかわる対人サービスは大幅に減少し、調整・ネットワーク構築・評価などの間接的・後方支援サービスをより求められるようになってきた。これらの社会の変化に応じ、平成 22 年に保健師助産師看護師法が改正され、保健師の教育年限が 6 か月から 1 年以上に延長されると共に、大学における保健師教育も、従来の卒業要件から選択制の導入や修士課程での上乘せ教育が可能となる等、大きな変化が起きている。

このような中、自治体保健師の職業的アイデンティティの問題が指摘され始めた。アイデンティティは、Erikson が提唱した概念である。日本の自治体保健師の職業的アイデンティティの研究に関しては、既にいくつかの蓄積があり、測定尺度も開発されている。しかし、その尺度は、保健師が、Erikson のいう「生涯続く発達過程」を持つことや看護師の職業的アイデンティティを前提に作成されている。自治体保健師の職業的アイデンティティがこれらを前提にすることが妥当であるかは不明であり、概念レベルから検討する必要がある。

以上の点から、本研究は、日本の市町村保健師の職業的アイデンティティの構造を明らかにすることを目的とした。

方法

研究デザインをグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく質的研究とし、首都圏の市町村に1年以上勤務する協力保健師25名に半構造化インタビューを実施した。データ収集期間は、平成25年7月～平成26年11月までであった。

インタビュー内容は、「どのような時に、(自分が)保健師であると感じるか」、「どのような時に、(自分が)保健師の職業に合っていると感じるか」等について尋ねた。その他に、現在の年齢、性別、教育背景、経験年数、職位、配属・所属部署、前職経験の保健師の属性を尋ねる調査票への記入を事前に依頼した。インタビューは協力保健師の同意を得た上で録音し逐語録を作成した。

分析方法は、逐語録を分析データとし、データとメモを繰り返し読むことで全体の内容を把握した。その後、意味をまとまり毎に切片化し、切片に概念ラベルを付けることで抽象化しカテゴリを作成した。カテゴリ間の関連性を検討しながら、カテゴリを生成し、最終的なモデルを完成させた。本研究は、東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理審査委員会の承認を得て行った。

結果

協力保健師に半構造化インタビューを実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的分析を実施し、生成された枠組みを説明する。文中では、コアカテゴリを[]、カテゴリを《 》、サブカテゴリを< >で示した。

[対人支援をする自分と行政組織で働く自分が共存・対立・葛藤しながら、よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する]というコアカテゴリが浮き彫りにされ、3つのアイデンティティ、すなわち、《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》、《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》、《よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する》が抽出された。

保健師は、相談者に直接対応し地域（住民）にはたらきかけ、職場である行政組織の中で自分が力を持つことによって施策形成に関与できること、よりよい地域づくりのために働くことをとおして、自分自身が保健師であることを実感していた。これら3つのアイデンティティは、保健師個人によって前面に出たり背面に隠れたりと様々なバリエーションがあった。

また、各アイデンティティは、安定したり揺らいだりしていた。そして、アイデンティティは、その他のアイデンティティと共存することもあった。《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する

≫というアイデンティティの間では、対立や葛藤が生じる場合もあった。更に、保健師の職業的アイデンティティは、類似した状況・状態に対しても、「保健師であることを実感する」場合と「保健師であることを実感しない」場合があり、両義的な性質を持つことが明らかになった。

アイデンティティ間の関係性を記述する。《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》というアイデンティティが前面に出る場合には、1)二つのアイデンティティの共存、2)《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》から《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》への対立感情、3)《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》から《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》への対立感情、4)二つのアイデンティティ間の葛藤が確認された。

また、三つのアイデンティティが前面に出る場合には、5)《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》というアイデンティティの共存、6)《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》から《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》への対立感情、7)《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》との間で葛藤が確認された。

更に、いずれか一つのアイデンティティが前面に出る場合には、8)《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》が前面に出る場合と、9)《よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する》が前面に出る場合とがあった。

以上のように3つのアイデンティティは、ある局面ではあるアイデンティティが前面に出たり、ある局面では背面に隠れたり、対立したり、葛藤したりと保健師個人によってその様態は様々であった。

考察

市町村保健師の職業的アイデンティティは、[対人支援をする自分と行政組織で働く自分が共存・対立・葛藤しながら、よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する]であると表現された。保健師の職業的アイデンティティには、安定と揺らぎがあった。また、アイデンティティの間には、共存に加えて、対立や葛藤が生じる場合があり、対立・葛藤は、《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》の間に見られた。

類似した状況・状態に対しても、「保健師であることを実感する」場合と「保健師である

ことを実感しない」場合とがあり、アイデンティティの両義性を確認できた。これは、アイデンティティ間の対立・葛藤を生じさせている一因であると推察された。

特に、アイデンティティ間で葛藤がある場合に、保健師は悶々としていた。この結果は、個人が複数のアイデンティティを持ちそれらが調和的に反応しない場合に、精神的健康に影響を受けるという先行研究とも一致していた。

実践への示唆として4点述べる。

1) 保健師は、《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》というアイデンティティの間で葛藤が生じたり、それぞれのアイデンティティが対立することがあるという、自身の仕事の特徴を認識し、アイデンティティを得ることの難しさを知っておく必要がある。

2) 《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》と《行政組織の中で働くことで保健師であることを実感する》を対立関係として捉えないような教育および職業的アイデンティティ形成のための支援が必要である。

3) 《よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する》ためには、《直接的な対人支援を通して保健師であることを実感する》ことが必要である。

4) 《よりよい地域づくりのために働くことで保健師であることを実感する》というアイデンティティが、安定した状態で前面に出るのは難しいという状況を認識しておく必要がある。